



TITLE:

まるさす以後ノ人口論 (まるさす生
誕百五十年記念号)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. まるさす以後ノ人口論 (まるさす生誕百五十年記念号). 経
済論叢 1916, 2(5): 1-20

ISSUE DATE:

1916-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/127016>

RIGHT:

まるさす以後ノ人口論

講師 米田庄太郎

まるさす以後ノ人口論ノ發達ヲ論ズルト云ヘバ、殆ント人口論ノ歴史ノ全體ヲ論ゼネバナラナイノデ甚タ廣大ナ問題トナルノデアル。ソレヲ僅カ三十分間アマリデ論ズルト云フコトハ甚ダ困難デ、満足ニ論ズルコトハ到底不可能デアルカモ知レナイ。併シ自分ガ此問題ヲ引キ受ケタ以上ハ何トカ始末ヲツケネバナラヌ。ソレデ色々考ヘタ結果、先ヅまるさすノ人口論ニ就テ理論上實際上如何ナル疑問ガ起リ得ルカヲ考ヘ、まるさす以後ノ人口論ノ諸説ハ夫レ夫レ其等ノ疑問ニ關シテ發達セルモノト見テ其ノ最モ代表的ナルモノノ主意ヲ極簡單ニ述ベ、次ニ其等ノ諸説ヲまるさす以後ノ人口ノ實際の狀態ト比較シテ以テ、まるさす以後ノ人口論ノ社會學的意義ヲ闡明スルト云フ方針ヲトルコトシタノデアル。

却説まるさすノ人口論ハ如何ナルモノデアルカハ、既ニ前講演者ニヨリテ詳シク論述サレタガ、彼ハ其名著「人口ノ原則」第一版ニ於テ論述シテ居ルコトト第二版以後殊ニ第六版ニ於テ論述シテ居ルコトトハ根本的ニハ異ナツテ居ラナイガ、併シ第一版ニ於テハ彼ノ所説ハ隨分過激デアルニ反シテ第六版ニ於テハ大ニ穩和デアル。而シテ第六版ニ於ケル彼ノ論述ハ第一版出版後彼カ詳シキ研究ト深イ考察トノ結果第一版ノ論述ヲ修正シタモノデアルカラ、彼ノ最モ圓熟セル真意ハ第

六版ニ於テ發揮サレテ居ルト見ルノハ穩當デアロウト思フ。まるさす人口論ニ關シテ昨年ノ晩ニ公ニサレタとむそん氏ノ最近ノ著作¹⁾ニ於テハ著者ハ右ノ見解ヲトツテ、詳シキ統計的研究ヲ以テまるさす説ヲ論證セントシテ居ル。併シまるさすノ説ガ大ニ世人ノ注意ヲ惹イタノハ、彼カ第一版ニ於テ論述セルカ如キ形態ニ於テデアツタ。るゑ、ばーりあー氏²⁾ハまるさすガ若シ第二版以後ニ於テ論述セルカ如キ形態デ第一版ヲ公ニシタノデアツタラバ、恐クハ彼ノ説ハサホド廣ク世人ノ注意ヲ惹カナカツタデアラウト云フテ居ル。更ニまるさす説ノ批評家ヤ反對者ハ一般ニ第一版ノ論述ニ就テ之ヲ批評シ或ハ反對シテ居ルノテアル。サレバ今まるさすノ人口論ニ結び付ケテ彼レ以後ノ人口論ノ發達ヲ考究セントスルニ當テハ、吾人ハ第一版ノ論述ヲ以テ彼ノ説ノ特質ヲ最モヨク或ハ最モ誇張セル形態ニ於テ發揮スルモノト見做サネハナラナイノテアル。而シテ今まるさすカ第一版ニ於テ論述シテ居ル事ヲ土臺トシテ普通ニ人口論上まるさすノ人口説トシテ知ラレテ居ルモノニ付テ考究シテ見ルニ其ノ主意ハツマリ先ツ人口ハ常ニ生活資料以上ニ増加スル傾向ヲ自然的ニ具有シテ居ル、一層正確ニ云ハハ生活資料ハ精々ノ處デ算術級數デ増加スルダケデアルカ人口ハ幾何級數デ増加スル傾向ヲ本來具有シテ居ルト云フコトヲ人口ノ原則トシテ立言シ、次ニ其ノ自然的結果トシテ常ニ人口ト生活資料トノ均衡カ破レテ、人口過多ノ現象ガ起ル傾向ガアリ、而シテ人口過多ノ必然的結果トシテ貧困其他種々ナル社會的弊害カ起ルモノト推斷シ又實際ノ事實ニ就テ之ヲ論證セントシ、更ニ人口過多并ニ其ノ有害ナル諸般ノ結果ヲ豫防スルニハ文明人ハヨヒシク道德的制限ヲ行ハネバナラヌト云フコトニアルノデアル。カカル意味ニ於テ

1) Thompson, Population; A Study in malthusianism, 1915.

2) Paul Leroy-Beaulieu, La question de la Population, 1913, p. 21.

まるさすノ人口論ハ當時ノ歐洲殊ニ彼ノ母國英國ノ人口狀態及ヒ社會的經濟的狀態ニ當テハマル様ニ考ヘラレタカラ、色々批評ヲ加ヘル人々ノアツタニ係ラズ、彼ノ說ハ歐洲ノ思想界ヲ風靡シ、且ツ實際的政策ノ上ニモ重大ナル影響ヲ及ボシタノデアル。然ルニ今平靜ニ考ヘテ見ルト先ヅまるさすガ人口ノ原則ト稱スル思想ニ付テ色々ナ疑問カ起ツテクル。而シテ其ノ主要ナルモノヲ分類シテ見ルト大體上左ノ三種トナルト思フ。

(一) 人口ハ常ニ生活資料以上ニ増加スル自然ノ傾向ヲ具ヘテ居ルコトヲ承認スルモ、其超過ノ程度ヲ推測スル爲メニ、生活資料ハ精々ノ處デ算術級數デ増加スルニ過ギナイガ人口ハ幾何級數デ増加スル傾向ヲ有ツテ居ルト云フハ果シテ穩當デアルヤ否ヤト云フ疑問、

(二) 人口カ生活資料以上ニ増加スル傾向アルト云フコトハ古今東西ヲ通ジテ行ハルル普通の必然的ナ法則デハナクシテ、特ニ一定ノ歴史の時代ニ行ハレルガ、他ノ歴史の時代ニハ行ハレナイモノデハナイカト云フ疑問、換言スレハまるさすノ人口原則ト稱スルモノハまるさすノ考ヘシ如ク一ノ自然的法則デハナクシテ、一ノ歴史的な法則デアルノデハアルマイカト云フ疑問。

(三) 人口ハ常ニ生活資料以上ニ増加スル傾向アルト見ルハ根本的ニ謬見デハアルマイカト云フ疑問。

此等三種ノ疑問ニ於テ、余ハ第一ノ疑問ヨリシテまるさす說ノ修正說ガ起リ、第二ノ疑問ヨリシテまるさす說ノ部分的否定說、而シテ第三ノ疑問ヨリシテまるさす說ノ全部的否定說、即チ反まるさす說カ起ツタト見做シテ、之レヨリまるさす以後ノ人口論ノ最も主要ナルモノノ主意ヲ簡

單ニ述ベヤウト思フ。

次ニまるさすカ人口原則ノ必然の結果トシテ人口過多ノ現象ガ起リ、而シテ其ノ又必然の結果トシテ貧困其他ノ種々ナル社會の弊害ガ起ルト見ル説ニ對シテ左ノ如キ疑問ガ起リ得ル。

(一) まるさすノ人口原則ヲ承認シ又其ノ必然の結果トシテ人口過多ノ現象ガ起ルト認ムルモ、此ノ人口過多ノ現象ヲ以テ貧困其他ノ種々ナル社會の弊害ノ根本原因ト見ルハ穩當デナクシテ、此ノ人口過多ノ現象コソ實ニ人類ノ進化、文明ノ進歩ノ根本的原因或ハ根本的條件デア
ルノデハアルマイカト云フ疑問、

(二) 貧困其他ノ社會の弊害ハ根本的ニ人口過多ノ現象ヨリ起ルト見ルハ謬見ニシテ、其ノ根本的
原因ハ他ニアルノデハアルマイカト云フ疑問、

終リニまるさすガ道德的制限ニヨリテ人口ノ過多ヲ豫防セントスル見解ニ就テ左ノ疑問ガ起リ
得ル。

まるさすノ云フ道德的制限ノ如キモノヲ以テ果シテ有効ニ人口ノ過多ヲ豫防スルコトガ出來ル
カ、之レガ爲メニハ吾人ハ更ニ一層實際的ナ有効ナ手段ニ訴ヘネバナラナイノデハアルマイカ
ト云フ疑問、

而シテ此疑問ヨリシテ所謂新なるさす説ナルモノガ發達シタト考ヘラレルノデアアル。新まるさ
す説ノ最初ノ主意ハツマリまるさすノ云フ道德的制限ノ如キモノデハ到底人口過多ヲ豫防シ、隨
フテ貧困其他ノ社會の弊害ヲ救フコトハ出來ナイ。之レガ爲メニハドウシテモ人工避妊法ヲ用ヒ

ネ、ナラヌト云フニアツタノデアル。併シ今日デハ新まるさす説ハゆるせにつくすヤ其他ノ新思想ノ主意ヲ加味シテ中々複雑ナ又高尚ナ學説トナツテ居ル。サレド新まるさす説ニ就テハ次ニ神戶教授ガ特ニ詳シク御講演ニナルコトトナツテ居ツテ、今日色々新思想ノ影響ノ下デモトノ新まるさす説ガ如何ニ發達シタカハ同教授ヨリ御話シニナルコトト信ジマスカラ、新まるさす説ニ就テハ余ハ別ニ論述シナイコトトスル。

今まるさすノ人口論ニ就テハ以上述べシガ如キ種々ナル疑問ガ理論上又實際上起リ得ルノデアルガ、其等ノ疑問ヲ現實ニ呈出シテ人口問題ニ新シキ解決ヲ下サントスル努力ガ、即チまるさす以後ノ人口論ノ發達セル根本動機デアリ、又此ノ動機ヨリシテ種々ナル學説及ビ政策論ノ生レ出デタコトガ即チまるさす以後ノ人口論ノ發達デアルト余ハ考ヘルノデアル。

先ヅまるさすノ人口原則ニ關スル第一ノ疑問カラ發達セル學説或ハ思想ト見做シ得ラルルモノニ付テ、其ノ一般的主意ヲ簡單ニ述ベルガ、抑々人口ハ常ニ生活資料以上ニ増加スル傾向ヲ自然ニ具ヘテ居ルト云フコトハ疑ハレナイ事實デアル。併シ其ノ人口超過ノ程度ヲ正確ニ測定センガ爲メニまるさすガ生活資料ハ精々算術級數デ増加スルガ人口ハ幾何級數デ増加スル傾向ヲ有ツテ居ルト考ヘタノハ謬見デアル。是レハ種々ノ點ニ於ケルまるさすノ誤算カラ出タ謬見デアル。更ニ生活資料ト云フ語ハ隨分曖昧ナ語デ、まるさすモ一般ニ之ヲ只人間ノ生活ヲ維持スルニ必要ナ資料ト云フ様ナ意味ニ解シ、又彼ノ説ヲ非難スル人々モ一般ニカカル意味ニ解シテ居ル様デアルガ若シカカル意味ニ生活資料ト云フコトヲ解スルニ於テハまるさすノ人口原則ハ明ラカニ近代歐

米ノ經濟的發達ニ矛盾シテ居ルト云ハ予バナラヌ。近代歐米ノ富ノ増加ハ非常ナ割合デ行ハレテ居ツテ、人口増加ノ割合ヨリモ遙カニ大ナルモノデアル。併シ若シ生活資料ト云フコトヲ時代ノ進歩、文明ノ發達ニ伴ナフテ高マリ行ク生活標準或ハ生活平面ヲ實現スルニ必要ナル資料ト云フ意味ニ解スルトキハ、人口ハ明ラカニ生活資料以上ニ増加スル傾向ヲ表ハシテ居ルノデアル。現ニ近代人が盛ニ人工避妊ヲ行フタリ、又妻ヨリハ寧ろ淫賣ヲ利用シテ性慾ヲ充タサントスル傾向ヲ表ハシテ居ルコトナゾハ、明ラカニ生活標準又ハ生活水面ヲ維持シ或ハ高メントスル彼等ガ、人口ノ生活資料以上ニ増加セントスル傾向ノ壓迫ヲ如何ニ強ク感ジテ居ルカヲ證明シテ居ルノデアル。

以上簡單ニ述ベシコトハ修正なるさす説ト總稱シ得ラルル諸學説ニ通ズル一般的思想デアルト思フガ、此種ノ人口論ハ今日モ最モ汎ク行ハレテ居ルト思ハレル。但シ余カ汎ク修正なるさす説ト總稱セントスル諸學説ノ間ニハ種々ナル差異ガアルノデ中ニハ大分なるさす説ノ主意カラ離レテ居ル様ニ思ハルモノモアル。茲ニハ其ノ一例トシテ近頃獨逸ノもむべると氏ノ唱ヘ出ダシタ説ヲアゲテ置カウト思フ。

もむべると氏³⁾ノ論ズル處ニヨルニ、まるさすハ豫防的交接或ハ避妊的交接ガ人口運動ノ上ニ及ボス影響ヲ明ラカニハ認メテ居ラナイ。又彼ハ安寧及ビ文化ト性慾衝動及ビ生殖衝動トノ間ニ甚ダ密接ナル關係ノ存在スルコトヲ了解シテ居ラナイ。まるさすハ安寧ノ増進、生活ノ改善ガ結婚ノ上ニ及ボス影響ノ益々増加スルコトヲ大ニ重要視シテ居ルガ、併シ安寧ノ増進、生活ノ發達ト

3) Mombert, Studien zur Bevölkerungsbewegung in Deutschland, 1907.

出産ノ増減トノ間ニ一層密接ナル關係アルヲ覺ツテ居ラナイ。而シテまるさすノ大ニ希望セル處ノ安寧ノ増進ガ結婚ノ上ニ及ボス影響ノ増進ハ今日マデノ處デハマダ一般ニ認メラレナイガ、然ルニ近來まるさすノ注意セザリシ新シキ因素ハ著シク發達シテ來テ居ル。是レ豫防の交接、即チ性慾ノ満足ト妊娠出産トヲ分離セシムル傾向ガ大ニ發達シ、又益々國民一般ニ蔓延シツツアルコトデアル。尙ホ此外ニ文明ノ進歩ニ伴フテ出産力ノ生理的障害ガ増進シツ、アルコトモ亦まるさすノ注意セザリシ點デアル。サレバ吾人ハまるさすガ列舉セル三種ノ障害或ハ制限ノ外ニ更ニ二種ノ新シキ障害或ハ制限ガ近來著シク増進シツツアルコトヲ認メネバナラナイノデアル。一ハ人間ノ出産力ヲ傷害スル生理的障害ニシテ、二ハ性慾満足ト妊娠出産トヲ分離セシムル心理的障害デアル。而シテ此等二種ノ障害ハ安寧ノ増進、文化ノ發達ニ伴ナフテ益々増大シツツアルモノデアル。

以上述べシもむべるとノ説ハ或意味ニ於テハまるさす説ニ反對スルモノトモ見ラレルガ、併シ同氏ハ別ニまるさすノ人口原則ヲ根本的の否定シテ居ルトハ思ハレナイカラ、余ハヤハリ修正まるさす説ノ一種ト見做スガ適當デアラウト思フ。

次ニまるさすノ人口原則ニ關スル第二ノ疑問ヨリ發達セルモノト見做シ得ラルル學說ノ根本思想ヲ極簡單ニ述ベテ置クガ、今此種ノ人口論ニ於テ、其ノ根本思想トナツテ居ルモノハ、ツマリ人口ガ生活資料以上ニ増加スル傾向ハ古今東西ニ通ジテ現ハルル普遍的必然的の傾向デハナクシテ、精々ノ處デ一定ノ歴史の時代又ハ一定ノ事情ノ下ニ現ハルルニ過ぎナイモノデアル。サレバ

まるさすノ人口原則ナルモノハ普遍的必然的ナル自然法則デナクシテ一定ノ歴史の時代ニ特有ナル歴史的法則デアルト云フコトデアル。

今此ノ思想ヲ始メテ明白ニ論述シタルハかゝる、まるさすデアルト思フガ、彼ノ考フル處ニヨレバ抽象的不變的ナル人口法則ト云フ様ナモノハ只動植物間ニ於テ且ツ彼等ガ人間ノ影響ヲ全ク受ケナイ狀態ニアルニ於テノミ行ハルルモノニシテ、人類ニ於テハカカル法則ハ存在シナイ。人類ニアリテハ其ノ各歴史の時代ハ夫レ夫レ特殊ノ人口法則ヲ有シ、而シテ其ノ特殊ノ人口法則ハ其時代以外ニ適用サレナイモノデアル。カノまるさすノ人口原則ナルモノハ近世資本主義時代ニ特有ノ人口法則トシテハ正當デアル。併シ其ハ只此ノ資本主義時代ニ特有ノ歴史的法則ニシテ、他ノ歴史の時代ニ適用サレルモノデナイ。サレバ現今ノ資本主義時代ガ過キ去リ、新シキ社會主義時代ガ現ハレテクルトまるさすノ人口原則ナルモノハ全ク適用サレナクナルノデアル。

以上述べシまるさすノ人口法則ノ觀念ハ其後ノ人口論ノ上ニ重要ナル影響ヲ及ボセルモノニシテ、伊太利ノろりあ氏ノ説⁴⁾、即チ人口ハ社會組織ト密接ニ結合シ、更ニ社會組織ハ土地所有制度ト密接ニ結合スルモノニシテ人口運動ハ結局土地所有制度ノ變遷ニヨリテ決定サレルモノデアルト見ル説ノ如キハ明ラカニまるさすノ思想ノ影響ヲ受ケテ發達セルモノデアル、又根本的ニハまるさす説ノ正當ナルヲ認メテ居ルゑるすた⁵⁾氏ノ説モ明ラカニまるさすノ影響ヲ示シテ居ル。更ニ近頃まるさす説反對ヲ標榜シテ起レルガおるふ氏ヤぶりんちんぐ氏ノ説モヤハリまるさすノ思想ノ影響ヲ示シテ居ルト思フ。茲ニ此等二氏ノ説ヲ極簡單ニ述ベテ置ク。

4) Loria, La legge di popolazione e il Sistema Sociale, 1882.

5) Elster, Bevölkerungslehre und Bevölkerungspolitik, (Conrads, Handwörterbuch der Staatswissenschaften.)

が、おるふ氏⁶⁾ノ論ズル處ニヨレバ、まるさすノ人口法則ハ過古ノ時代ニハ行ベレテ居ツタと思ハレルガ、併シ現代ノ文明國ニハ當テハマラナイ。現代ノ文明國ニアリテハ人口ハ生活資料(但シ氏ハ *Nahrungsspielraum* ト云フ語ヲ用ヒテ居ル)以上ニ増加スル傾向ヲ示サナイノミナラズ、生活資料ヲ充タスダケノ傾向スラ示シテ居ラナイ。寧ろ生活資料ガ増加スレバ増加スルホド之ニ後レル傾向ヲ示シテ居ルノデアル。が、おるふ氏ガ此ノ如ク現代文明國ニハ生活資料ガ却テ人口以上ニ増加スル傾向ヲ示シテ居ルト見ル點ニ於テ、余ガ第三ノ疑問ヨリ發達セルモノト見做スまるさす反對説ノ中ニ算フ可キモノデアルガ、併シ氏ハ又まるさすノ人口法則ハ過古ノ時代ニ於テハ行ハレテ居ツタコトヲ認メテ居ルカラ、其點ヨリ見テ余ハ氏ノ説ヲ便宜上茲ニアグルコトトシタノデアル。

ふりんちんぐ氏⁷⁾ノ説モヤハリまるさす反對説ノ中ニ算ヘルガ穩當カモ知レナイガ、併シ氏モ亦まるさすノ人口法則ハ一定ノ限界内ニ於テ、又未開人民間ニ於テハ正當デアルト認メテ居ルカラ便宜上余ハヤハリ茲ニ擧ゲテ置クノデアル。而シテ氏ノ考フル處ニヨレバ、統一的人口法則ナルモノガ存在スルヤ否ヤハトニカクトシテ實際ニハ今日マデニマダカ、ル法則ガ發見サレテ居ラナイ。而シテ人口ハ其ノ住息スル土地ノ性質ニ具ハレル事情關係ニ影響サレルコトハ極僅カデアツテ、主トシテ其人口其物ノ性質及ビ其ノ政治ノ性質ニヨツテ約束サレルノデアル。併シ氏ハまるさすノ説ヲ全ク排斥セントスルノデハナイ様デ、現存スル生活資料ノ分量ガ人口ノ増加ノ上ニ及ボス影響ハ認メテ居ル。而モ氏ハ此ノ影響ハ只狹イ範圍内ニ於テ、又未開人民間ニ於テ見ラレル

6) Wolf, Ein neuer Gegner des Malthus, (Zeitschrift für Socialwissenschaft, 1901).
„Nationalökonomie als Exakte Wissenschaft, 1908.
7) Prinzing, Bevölkerungstheoretische Probleme, (Zeitschrift für Socialwissenschaft, 1907.)

ダケデ、文化人民間ニアリテハ若シ生活資料ニ不足ヲ生ジ、且ツ其ノ不足カ比較的ニ永續スル場合ニハ彼等ハ種々ナル方法ヲ發明シ發見シテ之ヲ補ナシノデアル。併シ其不足補充或ハ新富源ノ開拓ガ如何ナル程度マデ遂行サレルカハ一ニ人民ノ生活力及ビ知能ノ如何ニヨルノデアルト考ヘテ居ル。

終リニまるさす人口原則ニ關スル第三ノ疑問ヨリ發達セルモノト見做サルルまるさす反對説ヲ簡單ニ説述シテ置カウト思フガ、茲ニ少シク注意ヲ加ヘテ置キタイ事ガアル。余ハ本講演ニ於テハまるさすノ人口原則ニ大ナリ小ナリ反對スル諸説ヲ、第二ノ疑問ヨリ發達シタト思ハルモノト第三ノ疑問ヨリ發達シタト思ハルモノトノ二部類ニ大別シ、前者ヲ以テ部分的反對説、後者ヲ以テ全部的反對説ト見做シテ夫レ夫レノ主要ナル學説ヲ配當シヤウト試ミテ居ルガ、夫レハ主トシテ講述ノ便宜上カラ來タ考ヘデアツテ、實際上判然其ノ何レカニ編入スルコトノ困難ナルモノハ少ナクナイノデアル。即チ一方カラ見テ部分的反對説ト見做サルルモノニシテ他方ヨリ見レバ全部的反對説ト見做サルルガ如キモノハ少ナクナイノデアル。サレバ此區別ハアマリ嚴格ナモノデナク主トシテ便宜上ノ區別デアルコトヲ記憶サレタイ。

今まるさす人口原則ニ關スル第三ノ疑問ヨリ發達セルモノト見做サルル諸説ニ通ズル一般的の見解ハ、まるさすガ人口ハ常ニ生活資料以上ニ増加スル傾向ヲ本來具有シテ居ルト見タノハ謬見ニシテ、人口ハ常ニカカル傾向ヲ有ツテ居ルモノデナイト見ルコトデアル。而シテ人口ト生活資料トノ關係ヲ此ノ如クニ觀念スルコトカラシテ理論上大體ニ於テ三種ノ説ガ立テ得ラレルノデアル。

一ハ人口ハ常ニ生活資料ト均衡ヲ保タントスル傾向ヲ有スルモノデアルト見ル説ニシテ、二ハ人類ノ進化スルニツレテ人口ハ自カラ生活資料ト均衡ヲ保チ或ハ生活資料ハ人口ノ増加以上ニ増加スルモノデアルト見ル説、三ハ人口ト生活資料トハ相互的影響ノ下デ相伴ナフテ増加シ行クモノデアルト見ル説デアル。但シ此ノ三種ノ別モアマリ嚴格ナモノデハナイガ、主トシテ講述ノ便宜上カラ此別ヲ立テテ置クノデアル。而シテ此等三種ノ説ヲA.B.Cニ區別シテ其ノ大要ヲ簡單ニ述ベテ置ク。

(A)人口ハ常ニ生活資料ト均衡ヲ保タントスル傾向ヲ有スルモノデアルト見ル説ハ佛蘭西ノぎゅい^{s)}や^r氏ニヨリテ始メテ詳細ニ論述サレタノデアルガ、同氏ノ論ズル處ニヨレバ、人口ハまるさすノ考ヘシ如ク絶ヘズ生活資料トノ均衡ヲ破ラントスルモノデハナク、却ツテ常ニ之レガ平準ニ適合セントスルモノデアル。統計ノ示ス處ニヨレバ生活資料ノ生産ガ増加スレバ人口モ亦増加シ、之レニ反シテ生活資料ノ生産ガ減少スルト人口ハ同ジ比例デ減少シテ居ル。若シ人口ガ外來原因ノ打撃ニヨリテ突然減少スル場合ニハ生活資料ハ減少シナイデ、出生ガ急ニ著シク増加シテ迅速ニ人口ノ隙間ヲ充タス。之レニ反シテ若シ偶然ナル壓迫ガ勞働ノ發達ヲ停止セシムル場合ニハ出生率ハ直チニ減少スル。終リニ人口ガ迅速ニ増加スル國ニ於テハ、此増加ハ人口密度ノ増進スルニツレテ減少シテ居ル。要スルニぎゅい^{s)}や^r氏ノ考フル處ニヨレバ何レノ國民ニ於テモ實際ニ養育スルコトノ出來ル以上ノ子供ハ決シテ生レナイノデアル。而シテ平均壽命ガ短縮スルトキカ、又ハ勞働ノ需要ガ増ストキノ外ハ出生ハ決シテ著シク増加シナイノデアル。但シ氏ガ勞働

s) Guillard, Elements de statistique humaine ou demographie comparée, 1855.

ノ需要カ増ストキハ云々ト云フテ居ルノハ是レ氏ハ人口ヲ養ナフモノハ土地ニ非ラズシテ勞働
デアルト考ヘタカラデアル。

尙ホぎゆいやる氏ノ説ハ其後べるちよん氏ニヨリテ一層詳シク展開サレタカ、べるちよん氏
ノ説ニ就テハ余ハ昨年國民經濟雜誌ニ於テ發表セル人口動態平行法則論中ニヤヤ詳シク述ベテ置
イタカラ右ノ論文ヲ參考セラレタイ。

(B)人類ノ進化ニツレテ人口ハ自カラ生活資料ト均衡ヲ保チ、又ハ生活資料ハ人口以上ニ増加ス
ルト見ル説、此ノ説ハすべんさーニヨツテ生物學上ヨリ始メテ明白ニ論述サレタノデアル。すべ
んさーハ生物ノ進化ヲ考察シテ簡體ノ發達ハ生殖力ノ減少ヲ伴フテ居ルコトヲ發見シ、而シテ
此ヲ人類ニモ適用シ、人類ニアリテモ簡人ノ發達スルニツレテ生殖力ガ減少シ、出生率ガ低下ス
ルモノデアルト推論シ、まるさすノ人口ハ永久ニ生活資料以上ニ増加スル傾向ガアツテ、人類ガ
如何ニ進歩シテモ常ニ人口過多ノ危險ニ脅カサレルモノノ如ク考フルハ謬見デアルト考ヘタノデ
アル。要スルニすべんさーハ人口増加ノ割合ト簡人化ノ發達ノ程度トハ反比例ヲナスモノニシ
テ、簡人化ガ益々發達スルニツレテ人口ノ増加力ハ減少シ、人口過多ノ恐れハ消失スルモノト考
ヘタノデアル。而シテ彼ノ見解ハ其後ノ人口論ノ上ニ重要ナル影響ヲ及ボシテ居ルノデアル。

すべんさート同ジク生物學の見地ヨリシテ人口問題ヲ論究シ、彼レト同様ナ説ヲ唱ヘテ居ル生
物學者ハ少ナクナイ、例ヘハ獨逸ノのつしく氏ノ如キデアル、茲ニハ只社會學者ヤ經濟學者ノ間ニ
於ケルすべんさーノ思想ノ影響ノ一班ヲ示スニ止メテ置クカ、「文明ト人口減少」ト題スル著名ナ

9) Spencer, A Theory of Population deduced from the General Law of Animal Fertility, Westminster Review, 1852.

ル書ヲ公ニシタルふらんすノブ yumon 氏ノ説ノ如キハ明カニすべんさーノ思想ヲ根柢トシ之レニ社會學的考究ヲ加ヘテ立テラレタモノデアルト思フ。同氏ハ先ヅ統計的研究ニヨリテ文明ノ進歩スルニツレ出生率ノ減少スルコトヲ證明シ、而シテ其原因ヲ探求シテ、之ヲ箇人ノ發達、箇人主義の民政主義ノ發達ニ歸シ居ルガ、更ニ同氏ノ説ヲ深ク研究シテ見ルト同氏ハツマリ箇人ノ發達ハ種屬ノ發達ト反比例シ、又社會的毛細管力 *la capillarité Sociale* ノ發達即チ各箇人が自分ノ地位以上ニマスマス進マントスル傾向ノ發達ト正比例シ、而シテ出生率ノ割合ハ社會的毛細管力ノ發達ト反比例スルモノト考ヘルノデアアル。

又「人口社會組織」ト題スル書ヲ公ニシテ、人口論者トシテ名聲ヲ舉ゲタ伊太利ノ「¹⁰⁾ 同氏ノ説モブ yumon 氏ノ説ト同ジクヤハリすべんさーノ思想ヲ社會學的經濟學的ニ練リ上ゲタモノト思ハルルガ、同氏ノ説ク處ニヨレバ、富ノ普及、そりだりちノ精神ノ増進ハ總テ箇人性ノ發達ヲ伴ナイ。而シテ箇人性、箇人主義ノ發達ハ總テ出生ノ減少ヲ伴フモノデアアル。サレバ現代文明國民ノ將來ハ人口過多ノ危險ヨリハ遙カニ多ク人口過少ノ危險ヲ伴ナフテ居ルト思ハレル。而シテ此危險ヲ免ルルニハ只一ノ方法アルバカリデアアル。是レ現在ノ經濟狀態及ビ今日ノ倫理想ヲ退ケ、組織アル協働及ビそりだりてノ精神ニ浸サレタル社會的意識ヲ之レニ代ヘルコトニヨリテ競争ノ一定ノ形態ヲ消滅セシムルコトデアアル。に「¹¹⁾ 同氏ハ最後ニ人口ノ新法則ナルモノヲ立テテ左ノ如ク説述シテ居ル。「箇人性ガ強ク發達シ、社會化ノ進歩ガ一切ノ箇人の活動ヲ破壊シナイ總テノ社會ニ於テハ、即チ富ガ大ニ小分セラレ、協働ノ高等ナル形態ニヨリテ不平等ノ社會的原因ガ除

10) Dumont, Dépopulation et civilisation, 1890.

11) Nitté, La Popolazione e il Sistema Sociale, 1894. La Population et le Système Social, 1897.

キ去ラルル總テノ社會ニ於テハ、出生ハ生活資料ト自カラ均衡ヲ保ツ傾向ヲ生ジ、而シテ人口の進化ノ律動的變動ハ人類ニ對シテ何等恐ル可キモノトナラナイデアラウ。

以上述べシ諸家ノ說ニ於テハ、一般ニ箇人ノ發達、社會ノ進歩ニヨリテ人口ハ自カラ生活資料ニ適合スルモノト見ル思想ガ主要ナル地位ヲ占メテ居ルノデアルガ、近來まゐさす反對說ヲ標榜シテ立テル獨逸ノ人口論者ノ中ニハ、更ニ一歩進デ人類ノ進化文化ノ發達ハ單ニ人口ヲシテ生活資料ニ適合セシムルバカリデナク、生活資料ヲシテ人口以上ニ増加セシメ、人口ノ増加ヲシテ生活資料ノ増進ニ後レシムル傾向ヲ起スモノデアルト主張スル人々ガアル。サキニ述べシが如るふ氏ノ如キハ其ノ一人デアルガ、おつべんはいま¹²⁾氏ハ更ニ一層詳シク同ジ主意ノ說ヲ論述シテ居ル。併シ茲ニハ別ニ氏ノ說ヲ詳シク述フル暇ハナイガ、要スルニ、が如るふ氏やおつべんはいま¹²⁾氏ナゾガ近頃盛ニ主張シテ居ル新說ニヨレバ、人口ハ本來生活資料以上ニ増加スル傾向ヲ有スルモノニ非ズシテ、寧ろ生活資料ガ人口以上ニ増加スル傾向ヲ有ツテ居ルノデアル。隨フテ人口ノ多イコトガ貧困ノ原因デハナクシテ寧ろ安寧幸福ノ増進ノ保證デアルノデアル。サレバ貧困ハまゐさすノ考ヘン如ク人口原則ヨリシテ自然法的ニ説明セラル可キモノデナク、他ノ原因ニヨツテ説明セラル可キモノデアル。此クテ此等諸家ノ唱フル新說ハまゐさす說トハ殆ド正反對ノモノトナツテ居ルノデアル。

尙ホ近頃出生率減少問題ニ關シテ歐米諸國ニ於テ續々刊行サレテ居ル無數ノ著作論文中ニハ部分的又ハ全體のニまゐさすノ人口原則ニ反對スル見解カ幾多現ハレテ居ル。併シ其等ノ諸見解ハ

12) Oppenheimer, Das Bevölkerungsgesetz des T. R. Malthus und der Neueren Nationalökonomie, 1901.

其根本思想ニ於テハ何レモ以上説述セルモノノ範圍外ニ出テ居ラナイカラ、茲ニハ別ニ論及セズニ置ク。但シ出生率減少問題ハ從來獨逸ノ人口學者ハアマリ重要視シテ居ラナカツタガ、然ルニ近來生出率減少ノ傾向カ同國ニ於テモ著シク現ハレテ來タ結果學者ガ大ニ此問題ニ注意シ始メ、此問題ニ關シテ一九一一年ヨリ一九一四年ノ始メ頃ニ至ルマデニ同國ニ於テ刊行サレシ單行本ダケデモ二百十六冊以上ニ達スルト云フコトデアル。¹³⁾

(C) まるさすノ人口原則ニ反對スル學說トシテ余ハ終リニ、人口ト生活資料トハ相互的影響ノ下デ相伴テ増加シ行クモノト見ル學說ヲ擧ゲテ置キタイト思フガ、此ノ思想ハ既ニベクカリアノ説ノ中ニ稍明白ニ現ハレテ居リ、又其後まるさす説批評家ノ所見中ニ屢々含蓄サレテ居ルコトヲ發見スルノデアル。併シ法則概念其ノ物ノ批判的考究ノ上カラ此思想ヲ始テ科學的ニ練リ上ゲント試ミタルハ伊太利ノかるり氏デアルト思フ。氏ハ先ヅ法則概念ヲ靜的世界觀ヲ基礎トシテ立テラレタルモノト動的的世界觀ヲ基礎トシテ立テラレタルモノト二種ニ大別シ、而シテ動的的世界觀ヲ基礎トシテ立テラレタル法則概念ニ非ズハ眞ニ法則概念ノ職分ヲ盡スモノデナイト論斷スルノデアルガ、然ニ氏ノ見ル處ニヨレハまるさすノ人口原則ナルモノハ先ヅ靜的世界觀ヲ基礎トシテ立テラレタル法則概念デアルカラ根本的ニ正當デナイノデアル。現代哲學及ビ科學ノ上カラ見テ眞ニ正當ト認ム可キ人口法則ハ動的的世界觀ヲ基礎トシテ立テラレタル法則概念ニ適合スルモノデナケレバナラス。かるり氏ハ更ニまるさすノ人口原則ハ重農主義的デアルカラ正當デナイト批評シ、而シテ眞正ナル人口法則ハ動的デアルト共ニ又重勞働主義的ノモノデアラネバナラスト論ジテ居

13) Mombert, Neuere Literatur aus Gebiete der Bevölkerungslehre und Bevölkerungs-Statistik, (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, September-Heft, 1915.)

ル。然ラハ動的ニシテ又重労働主義のデアルト云フ氏ノ人口法則ハ如何ナルモノデアアルカト云フニ氏ノ説ノ主意ハ左ノ如クデアアル。

夫レ外國ノ破壊の勢力ニ打チ勝ツテ生命ヲ増サントスルハ生命ノ原本の衝動デアアル。而シテ此ノ原本の衝動ヨリシテ人口ハ増加スルノデアアルガ、今人口ノ増加ハ自カラ強大ナル生産の反動ヲ惹起スル、而シテ此ノ強大ナル生産の反動ハ人口ノ増加ニ比例スル以上ニ經濟的社會ノ富ヲ増進セシメ、其ノ富ノ増進ハ又人口ノ増加ヲ可能ナラシムルノデアアル。是レ人口ト生産トノ間ニ於ケル一ノ永久の律動デアアル、一ノ永久ナル勝利交代デアアル。國民經濟的社會ハ各々其ノ發達サセラルコトノ出來ル労働ノ總額ニヨリテ相互ニ他ヨリ區別サレルモノデアアルガ、此ノ労働ナルモノハツマリ社會ガ環境ノ作用及ビ人口變動ノ作用ニ對シテ自カラ起シ得ル反動デアアル。而シテ此反動ヲ最モ強烈ナル様式ニ於テ發展スル社會ガ即チ優勝ナル社會デアアル。然ラバ此ノ最モ強烈ナル様式トハ何デアアルカト云フニ是レ即チ最モ強烈ナル工業化ノ事デアツテ、是ニヨツテ人口ト生産トノ間ノ相互的勝利ノ過程ハ反動即チ生産ノ效果ヲ大ニ増加セシムルノデアアル。詳ク云ヘバ強烈ナル工業化ニヨリテ國民經濟的社會ハ迅速ニ富ヲ増進セシメ、又啻ニ其所屬員ヲシテ其内ニ生活スルヲ得セシメ國外移住ノ必要ヲ絶滅セシメ、死亡率ヲ大ニ減少セシムルノミナラズ、更ニ人口ヲシテ益々迅速ニ増加セシメルノデアアル。

尙ホかるり氏ノ説ノ詳細ニ就テハ同氏ガ一昨年伊太利社會學評論ニ於テ發表セル論文ヲ一讀セラレヨ。但シ右ノ論文ノ大要ハ余ハ本論叢大正四年十月號及ビ十二月號中ニ抄譯シテ置イタカ

14) Filippo Carli, L'Evoluzione economica della Germania e la legge di popolazione, Rivista Italiana di Sociologia, Settembre-Dicembre, 1914.

ヲ參考セラレタイ。

却説以上述べ來リシ處ニヨリテまるさす以後人口原則ニ關スル思想學説ハ如何ニ發達シ、變遷シタカヲ大體上示シタト思フカラ、次ニまるさす説ノ第二ノ思想、即チ人口原則ノ必然の結果トシテ人口過多ノ現象ガ起リ、而テ又其ノ必然の結果トシテ貧困其他ノ種々ナル社會的弊害ガ起ルト見ル思想ニ關シテ理論上起リ得ル疑問ヲ傳フテ其ノ發達變遷ヲ概論シヤウト思フガ、先ヅ起リ得ル疑問ハ、サキニ述ベシ如ク、「まるさすノ人口原則ヲ承認シ、又其ノ必然の結果トシテ人口過多ノ現象ガ起ルト認ムルモ、此ノ人口過多ノ現象ヲ以テ貧困其他ノ種々ナル社會的弊害ノ根本原因ト見ルハ穩當デナクシテ、此ノ人口過多ノ現象コソ實ニ人類ノ進化、文明ノ進歩ノ根本的原因或ハ根本的條件デアルノデハアルマイカト云フ」疑問デアル。吾人ハ先ヅ此疑問ヨリシテだういんノ生物進化論ガ發達シタト見做スコトガ出來ル。茲ニだういん説ヲ詳シク述ブル暇モ必要モナイガ、要スルニだういん説ハ生物ガ食物以上ニ増加スル傾向ヲ有スルコトヲ疑フ可カラザル事實トシテ前定シ而テ其レガ爲メニ生存競争ガ起リ、自然淘汰ガ行ハレ、適者殘存ニヨリテ以テ生物ガ進化スルモノト見ルノテアル。而テだういん説ヲ人類社會ニ應用シ生物進化ノ原則ハ又同時ニ社會進化ノ原則テアルト觀念スル社會學者、經濟學者其他ノ社會科學者ハ一般ニまるさすノ人口原則ヲ承認スルト同時ニ之ヲ以テ本來社會進化、文明進歩ノ根本原則或ハ根本條件ト見做シ、まるさすトハ反對ノ決論ヲ引キ出シテ居ルノテアル。併シ近來生物學上ニ於テだういん説ニ反對スル諸説カ勃興スルニ當テ社會科學者間ニ於テモ、少クモだういん説ノ解スルカ如キ

意味ニテ生存競争及ヒ淘汰カ社會進化、文化發展ノ根本原則或ハ根本條件ヲアルト見ル說ニ反對スル諸說カ大ニ勃興シテ居ル。

次ニまるさすカ人口原則ヨリ引き出シタル結論ニ關シテ起リ得ル第二ノ疑問ハ是レ亦サキニ述ヘシ如ク、貧困其他ノ社會の弊害ハ根本的ニ人口過多ノ現象ヨリ起ルト見ルハ謬見ニシテ、其根本の原因ハ他ニアルノデハアルマイカト云フ疑問デアル。而シテ吾人ハ此疑問ヨリ發達セルモノト見做シテ、カノ貧困ノ根本原因ヲ富ノ分配制度ノ不正、不公平ナルコトヤ其ノ他ノ社會的組織ノ缺陷ニ求メントスル諸說、人類學的及ヒ心理學的研究ヨリシテ貧困ノ根本原因ヲ箇人ノ身體的又ハ精神的ノ不常事項ニ求メントスル諸說及ヒ自然的災害ヲ以テ貧困ノ主要ナル原因ト認ムル諸說等ヲ考察スルコトガ出來ルノデアル。今ヤ貧困ノ原因ヤ貧民救濟政策ノ科學的研究ガ大ニ發達シテ世ノ識者ハまるさすノ時代ニ於ケル如ク單純ナル理論ヲ以テ満足シナイ様ニナツテ居ル。隨フテまるさす說ノ下スガ如キ單純ナル解釋ハ世ノ識者ヲ首肯セシムルコトガ出來ナクナツテ居ルノデアル。併シ茲ニ貧困研究ノ現狀ヲ詳述スル暇ハナイカラ、只まるさすノ貧困論ハアマリニ單純素樸ナモノデ今日ノ科學的要求ヲ充タスニ足ラナイモノデアルコトヲ一言スルニ止メテ置ク。

以上述ヘ來リシ處ニヨリテ、余ハまるさすノ人口論カ其ノ根底トナス處ノ人口原則ニ關シテ、又其ノ人口原則ノ自然的結論トシテ引き出サレタル貧困原因論ニ關シテ、其ノ後如何ニ批判セラレ、隨フテ人口論カ彼レ以後如何ニ發達シタカヲ大體上明ラカニシタト信スルガ、終リニまるさす時代及ヒ其以後ニ於ケル人口其物ノ實際的狀態ノ變動ヲ考察シテまるさすノ人口論及ヒ其ノ以

後ノ人口論ノ發達ノ社會學的意味ノ一端ヲ極簡單ニ論述シテ置カウト思フ。

今まるさすノ時代ヨリ一八七八年頃ニ至ルマデハ英國ノ人口ハ著シク増加スル傾向ヲ示シ、獨逸及ヒ或小國ヲ除ケハ英國ノ人口増加ノ形勢ハ他ノ總テノ歐洲諸國ニ勝ツテ居ツタノデアル。而テ此ノ人口増加ノ著シキ形勢ヲ當時ノ經濟的狀態ニ對照シテ考察シテ見ルト確カニ人口ハ生活資料以上ニ増加スル傾向ヲ本來具有スルモノノ如ク考ヘラレタノデアル。サレバまるさすノ人口原則ハ色々批評ヲ加フル學者ノアリシニ係ラズ、一般ニ眞理トシテ認メラレテ居ツタノデアル。而シテ英國ノ人口増加ノ最モ大ナリシ一八七七年頃ヨリシテぶらつごろーヤあんにー、べさんとなゾガ盛カンニ新まるさす説ヲ宣傳シ始メタノデアル、然ルニ其ノ後英國ノ人口出生率モ亦人口増加率モ段々減少スル傾向ヲ示シテ來タ。〔評シクハ余が昨年國民經濟雜誌ニ於テ發表セル人口動態平行法則論參考〕。此クテまるさす説ニ修正ヲ加ヘントスル説ヤ之ヲ批評スル傾向又ハ之ニ反對スル説ニ注意スル傾向等ガ英國ノ學者ノ間ニモ段々發達シテ來タノデアル。

佛國ニ於テモ第十九世紀ノ始メニ於テハ人口増加率ハ可也大ナルモノデアツタ。サレバセ、ペ、セーノ如キハまるさす説ヲ傳承シテ居ツタノデアル。然ルニ佛國ニ於テハ早クヨリ人口出生率ハ減少スル傾向ヲ示シ、又人口増加率モ大ニ減少シテ居ツタ。サレバ同國ニ於テハまるさす説ハ始めヨリアマリ勢力ヲ振ハナカツタノデアル。

獨逸ニ於テハ近頃ニ至ルマデハ人口出生率モ人口増加率モ大ニシテ、且ツ、減少スル傾向ヲ示シテ居ラナカツタ。サレバ獨逸ノ學者ハ一般ニまるさす説ヲ其儘ニ或ハ多少ノ修正ヲ加ヘテ承認

シテ居ツタノデアル。然ルニ近來同國ニ於テモ出生率減少及ヒ増加率減少ノ傾向ハ明ラカニ現ハレテ來タ。而シテ此事ハサキニモ述ベシ如ク、甚ダ重大ナル人口問題トシテ今ヤ同國ノ學者ガ盛カンニ論究シテ來タノデアルガ、是レト同時ニまるさす反對說ヤ或ハ反對說ト見做シテモヨイ程ノ修正說ガ今ヤ同國ノ學者間ニ段々勢力ヲ得テ來テ居ルノデアル。

サレバ余ハ大體上ニ於テまるさす以後ノ人口論ノ發達ハ各國ニ於ケル實際的人口狀態ノ發達ニ大ニ影響サレテ居ルト考ヘルノデアル。而シテ此ノ方面ヨリ見テまるさす以後ノ人口論ノ發達ノ社會學的意義ノ一端ヲ明ラカニ窺フコトガ出來ルト信ズルノデアル。尙ホ此ノ點ニ付テ余ハ一層詳シク論述シタイト思フガ、又其他ノ方面ヨリモ見テまるさす以後ノ人口論ノ發達ノ社會學的意義ヲ論述シタイト思フガ、茲ニハ最早其暇ハナイカラ以上論述セシダケニ止メ、詳シクハ他日別ニ一論文トシテ論述スルコトトスル。